

研究課題	まちとひと、せかいと未来をつなぐ森田未来プロジェクト
副題	～まちづくり参画型PBLカリキュラムの開発～
キーワード	PBL SDGs まちづくり 協働探究 生徒エージェンシー 共同エージェンシー
学校/団体名	公立福井市森田中学校
所在地	〒910-0134 福井県福井市上野本町1丁目1077
ホームページ	http://www.fukui-city.ed.jp/morita-j/

1. 研究の背景

本校ではこれまで3年間を通じた地域探究プロジェクトとその実践カリキュラムの研究に取り組んできた。コロナ禍のため、これまでの概念でのカリキュラムづくりは難航したが、その中でも子どもたちの成長や経験に基づいた学びを実現しようと様々な工夫を行ってきた。

昨年度から、第1学年においては「もりたSDGsプロジェクト」、第2学年においては「発見！森田と自分の未来～福井をPRしよう～」、第3学年においては「森田未来プロジェクト」など、総合的な学習の時間などを中心に地域社会とつながるプロジェクト型学習に取り組んできた。ICT機器やインターネットを有効活用したり、地域のリソースを活用しながら地域の方々と連携したりしていくことで、生徒たちにとって将来の基盤となる学びが可能であると実感することができた。来年度に向けて、さらに全学年で挑戦的な実践を展開し、新たなカリキュラムを構築していきたいと考えている。そのための研究組織の在り方、教育実践研究の年間カリキュラム、新しい評価と指導支援システムの構築も併行して取り組んでいくことが今後の課題であると捉えている。

2. 研究の目的

生徒たちにVUCA時代を切り拓き、well-beingな世界を創り出す資質・能力を培うことができるPBL（プロジェクト型学習）カリキュラムの開発と、生徒たちが学びの主体となる「テーマ」設定の在り方、協働を生み出す「カリキュラム」の展開、そこで培われた資質・能力の形成を実感させる新しい「評価」のシステムの開発を目指していく。

1) 3年間を通じた地域探究プロジェクト型学習カリキュラムの開発

地域と連携し、生徒たちが課題を見出して、「中学生だからこそできること」を意識しながら、生徒のAgencyを発揮し、協働探究を実践できるような学習の展開を目指す。ICTを活用しながら発信の場も工夫し、学年間で共有し、世代継承できるような学校文化の形成を目指す。

2) 全教科・領域が連携したプロジェクト型学習の単元開発

生徒たちにとって、未来社会において必要となってくるコンピテンシーを教員全員で共有し、単元実践を通して培わせていく。生徒たちに学びや成長を実感させる場、保護者や地域の方々とともに共有できるような評価と指導支援システムの構築を、ICTを活用して進めていく。

3. 研究の経過

時期	取り組み内容と評価のための記録
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT機器活用研修会（教員用校内研修） iPadの使用方法や、まなびポケット、Office365などのクラウドサービスの活用方法について研修を実施した。 ・ 教育実践リーフレット（教員、保護者に配付） 森田中のめざす学びや、各教科における指導と評価の方針を教員、保護者と共有するためのリーフレットを作成した。
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1人1授業期間 異教科異学年の授業研究のための小グループを、年間通して設定し、授業公開や子どもたちの学びの見取りを元にした授業研究会を実施してきた。 ・ 3年生修学旅行における校外学習「三国あわらシャルソン」 総合的な学習の時間で取り組んできた活動を発展させ、地域の魅力を調査した内容を各グループで短編動画にまとめ、ICT機器を使って校内で発表した。 ※シャルソンとは、タイムを競うマラソンではなく、仲間たちとまちあるきをしながら地域の方と交流したり、施設や企業を訪問したりしながら、経験してきたことを競うソーシャルマラソンの略称である。
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 公開授業研究会 代表授業 社会科 全教員で参観し、自身の授業における実践事例などと併せて、これからの授業デザインや子どもたちの学びの様相と評価の在り方について議論をしていった。 ・ 理科教材システム研究会
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文化祭での全学年での実践交流 「森田未来プロジェクト Part1～SDGsを発信～」 体育館や多目的ホールなどで、iPadをプレゼンテーションなどで無線接続できるApple TVを2台購入に変更した。プレゼンテーションで活用できるプロジェクター（パナソニック社）を購入し、遠くからでもスライドの文字を確認が可能になった。 ・ 学校教育活動公開のためのHP開設 Googleサイトを活用して、パスワード付きの保護者用動画ページを作成した。
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年生秋の校外研修「森田未来プロジェクト Part2～森田のSDGsを発見～」 ・ 2年生職場体験と校外学習「
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年生 SDGs 学年発表会 ・ 公開授業研究会 代表授業 英語科
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校評価アンケートの実施（生徒・保護者）
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員・生徒の福井ラウンドテーブルへの参加 ・ もりたSDGs宣言「森田未来プロジェクト Part3～わたしたちのSDGs宣言～」
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3年生「もりた39シャルソン&ゴミ拾いクリーン大作戦」 ・ ICT機器の活用研修（教員研修） ・ 今年度の実践をまとめた冊子の作成

4. 代表的な実践

実践事例 1 1年生「もりた SDGs プロジェクト」

「森田未来プロジェクト～発見！森田と自分の未来～」と題し、郷土学習とキャリア教育に SDGs についての学習活動を絡めて総合的な学習を進めてきた。生徒自らが企画・運営を行い、達成感を味わいながら自信をつけて自治能力を身につけていけるように、次へ次へとレベルアップした活動の場面を設定することに重点を置いてきた。活動においては、毎回実行委員を募り、挑戦することを意識させた。

1) 文化祭 9/10 (金) 「森田未来プロジェクト Part1～SDGs を発信～」

最初は体育館にて、17の SDGs 目標についての説明と現状等を、クイズを交えて説明し、その後2, 3年生の各教室にて、グループで決めた SDGs 目標について、詳しくプレゼンテーションを行った。夏休みの課題で、自分が担当する SDGs 目標について調べ、自分たちにできることを実践したレポートを作成し、一人一人が SDGs 目標達成のための現状、課題、取組への理解が深まった。また、当日だけでなくスライドの作成や発表原稿づくりなど、一人一人が意欲的に活動する様子が見られた。



文化祭でのもりた SDGs 発表

2) 秋の校外研修 10/28 (木) 「森田未来プロジェクト Part2～森田の SDGs を発見～」

地域の企業と公民館での講義、散策を組み合わせ、班ごとにコースを組んで森田地区で行われている SDGs への取組を調査する活動を行った。当日は、その計画に基づきながら班のメンバーと協力して、臨機応変に活動することができた。普段、何気なく見ていた公園等の公共施設にも、SDGs への取組が施されていることに気づき、より一層地域の魅力を実感することができた。



地域の SDGs 調査と発表

3) 学年発表会 11/26 (金)

森田の SDGs のまとめとして、班ごとに、タブレットを用いスライド資料にまとめた。発表会当日は、企業や公民館の方にも参加していただき、自分たちが森田地区の企業、公民館、散策で学んだり発見したりした SDGs への取組などを、クイズ等を交えた発表を行うことができた。

4) 森田 SDGs 宣言 2月 「森田未来プロジェクト Part3～わたしたちの SDGs 宣言～」

5月から取り組んできた SDGs の学習の集大成としてリーフレットを作成した。未来の森田地区への思いを家族からもインタビューし、公民館の協力も得て実行委員が中心となって完成できた。

実践事例2 2年生テーマ探究「発見！森田と自分の未来」～福井をPRしよう～

2年生では、テーマ探究、校外学習、職場体験それぞれの活動で、個人の①テーマ設定、②事前学習、③実際の体験、④事後学習を行い、活動のまとめを発表した。1年生時の校外学習から同様な活動を繰り返し行うことで、まとめるポイントや発表時に話す内容を考慮し表現する成長が見られた。

「福井をPRする」ことを目標に、自分が調べたいテーマについて調査探究活動を行った。テーマを設定し下調べを行った後、夏休み・秋休みなどを利用し、実際に現地での調査活動やインタビュー活動を行い、それらを模造紙にまとめて、グループ毎の発表を経て代表者による全体発表会を行った。どのグループも福井の現状を見つめ、「未来に残していきたい」「よりよく改善させるべきだ」などの意見を持ち、第3者に伝えるPRをしたり、その方法を考えたりする提言を発表した。さらに、全体発表会で発表したグループのテーマに関しては3年時に実際に学校外で発表を行う予定である。また、全体発表会でさらに優れた提言として選ばれたグループは県の「福井ふるさと教育フェスタ」で発表（コロナ対策のためWEB発表）、または、校内にてポスター掲示を行った。



福井PRプロジェクトの校内発表

実践事例3 3年生「森田未来プロジェクト」

1) 修学旅行 地域探究「三国あわらシャルソン」

3年生では、「Grow Up」の学年目標のもと様々な学習活動を行ってきた。コロナ禍の影響で行事の実施が制限される中、生徒たちによる実行委員を中止に企画、運営した修学旅行を行った。また、学校祭、生徒会活動などの場でのリーダーシップ発揮、進路選択や実現に向けて、自分自身を成長させ、自分のベストを尽くせるように指導してきた。

県内の施設で学年の仲間と様々な体験をすることは新鮮であり、安心できる環境で楽しむことができた。また、県内各地の施設を訪問することで、新たな発見があったり、福井のことをより知ることができたりして、学校ではできない貴重な体験となった。また、2年次に行った「もりたシャルソン」を継続する形で「三国・あわらシャルソン」を行った。自分たちで訪問先や活動を企画し、活動内容を動画やプレゼンで発表する学びを通して、企画能力だけでなく、学びの成果を伝える能力を身につけることができた。宿泊先では、自分たちで計画・実行した企画で学年全員が盛り上がることができ、有意義な時間を過ごすことができた。



三国あわらシャルソンのゴールシーン

また、その後各グループで活動内容をまとめ、iPadを活用して短編動画を作成していった。各クラスでの発表のあと、体育館にて全体発表会を行い、互いの実践を評価し合った。

2) さまざまな学校行事の企画と運営

修学旅行や学校祭では、どの生徒も主体的に活動に向き合う様子が見られた。学年末には個人史「My story」に、これまでの実践をまとめ、自身の成長を実感していた。2月には、森田中学校を代表して生徒3名が、福井大学で開催された「福井ラウンドテーブル」に参加し、「森田推し隊プロジェクトで学んだこと」を県内外の学



森田駅の駅員さんに活動誌を手渡し

校に発信し、実践を交流した。幼稚園児から小学生、中学生、大学生、約200名が参加し、大人と一緒に意見を交流し、これからの未来社会に向けての構想を対等に議論していた。

卒業前には卒業プロジェクト実行委員の企画で、「もりた39シャルソン&ゴミ拾いクリーン大作戦」が開催された。クラスごとに仲間たちと学び育った森田のまちを4コースに分かれて活動した。ゴミ拾いも行い、学校に集まったゴミは約20袋分にもなった。併せて、「森田推し隊活動誌 MORITA OSHITAI!」をお世話になった地域のお店や施設に配付した。

実践事例4 理科の教材システム開発プロジェクト

福井県内の理科教員による研究会に本校の生徒も参加し、デジタル理科教材を作成した。さらに、地域のITの専門家からプログラミングについて講習を受け、WEB上に公開するシステムの構築に取り組んだ。春休みにはさらに地学教材のVR、AR教材の開発にも取り組む予定である。Meta社のオキュラスや、360°カメラ、デジタル顕微鏡などを活用して写真や映像資料を収集していくことを計画している。



プログラミングやHP作成方法を学ぶ

5. 研究の成果

○学校評価アンケートの実施と達成目標数値

本校全生徒を対象に学教評価アンケートを実施した。

- ・「学校が楽しい」91% 目標値は95%であるが、多くの生徒が自己肯定感をもちながら、充実した学校生活を送っていること、学習コミュニティとしての向上がうかがえる。
- ・自郷土愛の涵養 90% 地域の教育資源を活かした教育活動の推進について、各学年で工夫をこらして探究活動に取り組んできた。第1学年では、SDGsのことについて森田地区の企業や公的機関と連携して授業を展開してきた。第2学年では、ふるさと学習として福井県内に視野を広げ、九頭竜川でアラレガコを調べたり、森田まつりの提言を発表したりするなど、「ふるさと森田・福井」の資源を最大限に活用してきた。生徒からも、「総合的な学習の時間では、いろいろなことを調べて充実した学習ができている」の項目において、96%の肯定的評価を得ることができた。

○地域の方々からの支援や評価

3年生の修学旅行における「三国あわらシャルソン」でお世話になった田嶋牧場の店主の方から生徒たちの活動に対してメッセージをいただいた。地域に出て活動してきた生徒たちにとっては、これまでの取組を評価し、さらに推進力を生み出してくれるものとなった。

このように地域に出て生徒たちが活動し、学び、それを発信することで、探究は広がり、深まることを生徒も教員も実感することができた。また、これらを学年だよりで継続的に家庭にも伝えることで、保護者とも彼らの成長をロングスパンな視点で共有していくことの大切さを実感することができた。

突然失礼します あわら市に住む田嶋という者です。先日は、修学旅行の折に我が「田嶋牧場のソフトクリーム屋」に立ち寄って下さりありがとうございました。「おいしい!」と言っていただき、皆さんの若くお元気な姿に接することができ、とてもうれしかったです。その時にいただいた“MORITA OSHITAI!”という活動誌を読ませてもらい思わずひとりパチパチと拍手していました。

町づくりは役所や一部のみに任せるのではなく、住民のひとりひとりが考えていかなくては、中々成果があがらないなあ、子どもの頃から自分の町を良くしたいという気持ちをもってくれるといいなあと思うことが度々ありましたので森田中学の生徒さんの取り組みは本当に感心致しました。

御苦労も多々あったことと思いますが、最後のおひとりおひとりの言葉を拝読し、成長されたんだなあ、またまた拍手を送りたくなりました。森田の住民ではありませんが、「ありがとう」と言いたいです。

森田から福井、日本、世界へと、そして地球のことも考えていって下さい。地球人ひとりひとりが考えていくべきことですが…。

御礼と感想を伝えさせていただきました。皆さんお元気で! 田嶋 恵子

修学旅行の訪問先からのお手紙

6. 今後の課題・展望

生徒たちの学びがつながるように、小学校や高校との連携が必要になっている。探究を軸として、培われた資質能力をつなげるために情報交換、連携をとっていきたい。地域に実際に足を運び、地域の方と関わることによって気づくこと、新たな発見や課題に出会える。

本校は生徒数の増加に伴い、数年後に新築移転される予定である。学校文化を形成し、それに応じた学校がデザインされることが望ましい。生徒たち一人一人が自己の才能を開花させることができる、人生の基盤づくりができる環境としての新しい学校づくりを、生徒たちと教員、保護者、地域の方々と一緒に考えていけるコミュニティづくりを目指していきたい。

7. おわりに

生徒たちが主体となり、地域と共に探究し続ける学校を目指してプロジェクト学習を通して耕された感覚や自信は、次なる発想と行動へとつながる。ストーリーがあるからこそ、「成長」を生徒自身も実感し、教員、保護者も共感することができる。生徒たちの姿や声、情熱を見て感じ、教員たちもまた、それを支えるために協働探究する。そして、ロングスパンな実践を共有することによってエージェンシーを共に認識することが可能になる。

8. 参考文献

- ・白井俊(2020)『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』 ミネルヴァ書房
- ・秋田喜代美・福井大学教育学部附属義務教育学校研究会(2018)『福井発プロジェクト型学習:未来を創る子どもたち』 東洋館出版社
- ・木村優・岸野麻衣編著(2019)『授業研究:実践を変え、理論を革新する』 新曜社